

## 最近のアメリカの飛行機内と空港事情

昨年、一昨年とアメリカの各地とパナマを訪れる機会がありました。現役時代には特派員として約10年間、パナマを拠点に北南米の各国を回っていたものでした。定年5年目の一昨年、ほぼ10年ぶりに太平洋の上空を越えた私は、行く先々で新鮮な驚きや感動に直面しました。そんなエピソードの一端を、最初に「空の旅」からお伝えしたいと思います。まずは一昨年、「風邪と共に去りぬ」の舞台アトランタとニューオーリンズを訪れた際の話です。

### たくましいスチュワーデス

限られた年金生活のなかでの海外訪問です。できる限りコストを抑えるために、フライト、ホテルとも旅行社を通さず、すべてインターネットで予約しました。6月下旬。夏の旅行シーズンに入る直前でした。アトランタに行きニューオーリンズから帰る航路の、ネット上の一覧表に載っている各航空会社の最安値はコンチネンタル航空でした。往復で72000円。日系の航空会社では10万円を超えていました。

これに現役時代にもあった空港使用税等が加算されるのは仕方ないとしても、「燃料費」と称する項目が加わっているのには驚きました。しかも16000円もの高額です。世界的にこれだけ石油が値上がりしている時世、止むを得ないことなのでしょう。

ところで、日本人乗客にとって、日系の航空会社と比べて機内食が舌に合わないものがあることは承知の上のこと。値段も安いわけだし、アメリカ機であればアメリカ人向けの食事内容になるのも当然でもあるでしょう。それよりも目に付いたのは、たくましい金髪のスチュワーデス(現在は「フライトアテンダント」と呼ぶ)の姿でした。

機内に10数人いる彼女らのほとんどが、見たところ30代から50代、なかには60歳を超えていると思われる婦人もサービスに当たっていました。キャビンの上の棚の荷物を整理するとき、また食事をテーブルに乗せてくれるときの腕のたくましさ。日本人スチュワーデスの持つ優しさとか繊細さといった面はあまり見られません。それよりも、力強くテキパキと乗客の安全を守るために動いているようにも思えました。

アメリカには年齢による一律定年制はありません。年齢で職場を制限することは差別になるという法律(Age Discrimination in Employment Act)もあるのです。人種を含めた“差別”ということに対するアメリカ社会の開かれた一面を見る思がしたものです。

### 珍しく非能率だった入国審査

ヒューストンのジョージ・ブッシュ国際空港。コンチネンタル航空のハブ空港です。アトランタに行くのには、まずここで入国審査を受けなければなりません。機内を出て入国審査場に着くと、なんと200人余りが仕切られたロープに沿って何列にもジグザグ状に並んでいました。見ると受付のブース(審査台)は片側に40あるものの審査官のいるのは14ブースのみ。残りは“Closed (閉鎖中)”との信号が出ていました。列はなかなか進みません。

周りを見るとここで乗り換え、メキシコやサンパウロに飛ぶ人もいます。私は列の整理にあたっていた係官に声をかけました。

「これでは次のフライトに間に合わなくなってしまう。時間を心配している人もいますけど、なんとかならないもんですか？」

身長 180 センチ余りの黒人の係官。ガッシリとした体つきで、笑うと金歯が愛嬌を増します。

「実は自分も心配しているんだ。きょうのこの時間は 20 人の審査官が出ているはずなんだけど、どういうわけか今 14 人しかいない。きのうは飛行機から荷物を受け取り台に運ぶエスカレーターが故障して動かず、人力でエレベーターまで運んだんだ。約 3 時間、コンピュータの故障だったというんだがね」。

こう言い終わると彼は大きな声で、並んでいる乗客に状況を説明していました。

現役時代に中南米を回っているときにも、こうしたシーンには度々ぶつかりました。ただ違うのは、中南米ではほとんど状況の説明がなかったことです。でも乗客が係官に詰め寄るような光景は見られません。「アスタ・マニャーナ（スペイン語で『明日がある』という意味です）」が生活のリズムになっている国々のこと。「どうせ、いつかは飛ぶんだらうから」と乗客も心得たもののようでした。

とはいえ、ここはなんといったって合理主義を尊び、時間も正確を期すアメリカ、しかも宇宙基地のあるヒューストンです。最先端の技術も、すべては人間の運営またその心遣いにかかっているというエピソードの一端でした。

#### ここまで厳しいセキュリティーチェック

さて、入国審査は事前に聞いていた通り厳しいものでした。順番が来て、私が審査台に進むと「ハロー」と係官が愛想よく声をかけてきました。笑顔に訪米歓迎の心が映っています。しかし、こうした対応ながら、入念にパスポートのチェックを終えると、係官はまず私の人差し指の指紋を撮るように指示しました。片手ずつ台に乗せて指紋を撮ります。次にコンピュータにつながっている、備え付けの小さなカメラで顔写真を撮影されました。眼鏡も外してです。眼鏡による偽装を防ぐためなのでしょう。

すべてテロ防止のためなのです。この厳しさは国内線に乗り換えの際のセキュリティーチェックでも同じでした。成田空港でのチェックと違う点は：

- ① 靴を脱いで裸足にならなければいけない。靴下は履いたままでもよい。靴の中または靴底に危険物が隠されていないかのチェックです。
- ② 上着も脱ぎ、ズボンのベルトも外しました。金属のバックルが反応するからです。以後、国内で何回かの搭乗の際も毎回ベルトを外すことになったのです。ズボンがずり落ちて、日本人特有のステテコ姿にならないように、結構な気を遣ったものでした。

2001 年の 9・11 以降のアメリカ、世界の情勢を考えると、国家と市民また乗客を守るためにやむを得ない対応なのでしょう。

#### 空港内にもある宗教施設

昨年 11 月、パナマへの往路でヒューストンのジョージ・ブッシュ国際空港を 1 年ぶりに訪れました。入国審査場には今回も 200 人あまりの乗客が並んで待っていました。このときも係官は少なかったのですが、列が詰まってくると別サイドにあるブースに誘導の工夫がなされ、入国審査そのものは比較的スムーズに終わりました。

両手の人差し指の指紋を取り、コンピュータで顔写真を撮るのは前回と同じです。また搭乗の際、セキュリティチェックで靴を脱ぎ、ズボンのベルトをはずさなければならないのも同じでした。

半面、帰路のニューアーク国際空港——ニュージャージー州にありニューヨーク市に近い空港です——そのビル内で、“さすがはアメリカ”と感銘を受けた施設を目にしました。それは“Room for Meditation（お祈りのためのサロン）”があったことです。空港内の乗客が通る広い通路に、遠くからもすぐわかるような、お祈りのイラストのある案内板が、部屋の入り口の壁の 2 メートルくらいの高さのところに掲げられていました。

私も敬虔な仏教徒。もしかしたらお祈り（勤行）もできるかもしれないと、ドアを開け中に入ってみました。入り口には「ここでは靴を脱いでください」との掲示。10 メートル四方ほどの室内には、カトリックとプロテスタント用に別々に祭壇があり、20 ほどの椅子が並んでいました。イスラム教徒が座れるようにと思われるじゅうたんもありました。

朝 9 時。時間帯にもよるのでしょうか、室内には誰もいませんでした。残念ながら勤行をできるような状態にはなっていませんでした。もっとも、仏教にも多数の宗派や祈りの形式があることからすれば、それも無理なのかもしれません。ともあれ、宗教を重んじ、信仰を大切に、またすべてに平等に対応しようとするアメリカ社会の心の広さをかいま見る思いがしたものでした。